

鶴田知佳子

(東京女子大学)

ジークフリート・ラムラー (Siegfried Ramler) 氏が、2020年1月19日にハワイのカイルアの自宅において95歳の人生を閉じられた(1924年10月30日生—2020年1月19日没)。清子夫人によると静かに息をひきとられたとのことである。

ニュルンベルク裁判において同時通訳を担当したということで、2006年に本学会(当時は日本通訳学会)が招待して講演をした模様は、ラムラー氏本人が『通訳研究』第7号(2007)に *The Origin and Challenges of Simultaneous Interpretation: The Nuremberg Trial Experience* として寄稿している。当時、ラムラー氏はハワイ大学、イーストウェストセンター (Senior Adjunct Fellow, East-West Center, Hawaii) の所属であった。どのようにニュルンベルクで1945年当時は画期的であった同時通訳にたずさわることになったのか、この講演録で詳しく語っているが、その後生まれ故郷のウィーンよりもさらに長い年月を過ごすことになったハワイの地において、日本とアメリカとの架け橋になれるようにプナホウ高校の教員として尽力したことも語られている。プナホウ高校の教員として、日本の慶應義塾大学付属高等学校とのあいだで、これまた当時画期的であった国際交流プログラムの草分けをたちあげたことで、当時の教え子のひとり、川瀬勝氏からラムラー氏がハワイ在住であると知った。通訳者、そして通訳教育者である川瀬氏を介してラムラー氏の連絡先を得て、東京外国語大学における講演会が実現し、それをご縁にラムラーさんご夫妻との交流が今日に至るまで続いていた。

一言で言えば、ラムラー氏は時代のパイオニアだった。ユダヤ人であったラムラー氏は当時叔父が住んでいたロンドンで生活する機会に恵まれ英語を身につけた。その後1945年にドイツ駐留のアメリカ軍に通訳者としての職を得ていたが、ニュルンベルクで行われる軍事裁判で通訳者を募集するという話をきいて試験に合格、ドイツ語と英語のあいだの通訳者として1949年までニュルンベルクで勤務したという。

ラムラー氏が『通訳研究』に投稿の講演録でも詳述しているように、予備審問のあいだは逐次通訳がなされたという。しかし、ニュルンベルク裁判で必要な4つの言語で逐次通訳をするのでは、とても軍事裁判が追いつかないということで、同時通訳を試すことになった歴史の記録は実に興味深いものがある。その後は、ハワイの地で主に教育者として尽力するようになったラムラー氏であるが、同時通訳の仕事にたずさわるひとりとしてこの分野のパイオニアである先人への追悼文としたい。